

これは、ずっと昔から伝えられていて、今でも語られているお話です。子どもの頃に、わたしはこの話を聞きました。わたしに語ってくれた人も、やはり子どもどき聞いたそうです。さて、話を始めるとしましょう。

昔むかし、ある村に、男と女が暮らくっていて、子どもがふたりありました。ひとりは男の子で、もうひとりは女の子でした。幸せは長くは続きませんでした。女が病気になって、まもなく死んでしまったのです。

男は、それはそれは悲しんで、しまいには自分も死のうとさえ考えました。そんなとき、いとこが、男にいいました。

「おい、早まったことはするんじゃない。おれは、あるまじない師を知っているんだが、そのまじない師は、死んだ者を呼びもどすことができるそうなんだ」

男は、

「死んだ者を呼びもどしたつて、それがどうなるつていうんだ。おれが会いたいの生きてるあいつだ。それがだめなら、おれが死んで、あいつの所に会いに行く」といいました。いとこは、

「ともかく、おれといつしよに、まじない師の所に行つてみようじゃないか。何とかなるかもしれない」といいました。そこで、男は、ふたりの子どもを親戚しんせきに預けて、いとこといつしよに、出かけて行きました。

ふたりは、何日か歩いて、森の中のとある小屋にやつて来ました。そこに、まじない師が住んでいました。

「おまえたちふたりの頼みは何だね」と、まじない師は聞きました。いとこは、

「おれは、ただついて来ただけなんですがね。この男の妻が死んでしまったんです。それで、こいつ、妻をもう一度生き返らせてほしい。それがだめなら、自分が妻の所に行くつていうんです」と答えました。

「それは難しい頼みだな。だけど、できるだけのこととはやってみよう。でも、ほかの人に見られると効きき目がないから、おまえは家に帰つてくれ」

まじない師がそういうと、いとこは、村へ帰つて行きました。

まじない師は、男にいいました。

「おまえはどうしても妻に会いたいというんだな」

「はい、そのためなら、死んでもかまいません」

「じゃあ、よく聞くんのだ。わしのいうとおりにすれば、もしかすると、おまえは妻を死者の国から連れもどすことができるかもしれない。わしがまじないをかけるから、それがすんだら、おまえは、この小川に沿って歩いて行くのだ。すると、湖に出る。湖には島がある。岸边に木が一本浮かんでいるから、それに乗るんだ。木は、おまえを島まで運んでくれるだろう。島にほら穴があるから、それを下りて行くと死者の国に着く。妻を見つけたらすぐに連れ出すんだ。そこにとどまってはいけない。ふたりで木に乗って湖を渡るんだ。それから、まっすぐここへ来い。後のことは、わしに任せるといい」

男は、いうとおりにすると約束しました。

男は、まじない師にいわれて、着物をぬいではだかになりました。まじない師は、男の胸と背中与顔に、炭でふしぎな文字を書きつけました。そして、

「これを消してはいけないぞ。さもないと、すべてが水の泡になってしまうからな」といいました。

まじない師は、地面に、白い砂で幾重にも円を描き、そのあいだに、灰で、さまざまなるしや、文字や線を書き入れました。そして、その円の真ん中に男を立てせました。それから、笛を吹きながら、男のまわりを踊り始めました。

しばらくすると、男は、体がすっかり軽くなり、歩いてみると、足はほとんど地面についていませんでした。こうして、男は出かけて行きました。

小川に沿って歩いて行くと、湖に出ました。そこには、太い木が水に浮かんでいました。男が木に乗ると、木は、男を運んで湖を渡り、深い霧に閉ざされた島に向かって流れていきました。

島にたどり着くと、男は、死者の国に通じるほら穴を探しました。ほら穴は、すぐに見つかりました。下りて行くと、やがて、空き地に出ました。そこはもう死者の国で、日がさんさんと照っていました。

男は、さらに小道を下って、ある村にたどり着きました。村には、男の知り合いだった者たちがたくさんいて、両親や祖父母のすがありました。男が妻の居所を尋ねると、そこに連れて行ってくれました。

男と妻は、抱き合って喜びました。そのとき、まじない師が男の胸に書いた文字が消えてしまいました。

「さあ、いつしよに子どもたちの所に帰ろう」と、男がいうと、妻は、

「ええ、帰りますとも。でも、きょうはだめ。あしたにしましよう」といいました。

その晩、男はハンモックで寝ました。それで、背中に書いてあった文字も消えてしまいました。男はそれに気づきませんでした。

つぎの日、男は、家に帰ることをすっかりわすれていました。

三日目、小川で顔を洗おうとして、水にうつった顔の文字に気がつきました。男はおどろいて、子どもたちが待っているんだ、帰らなくてはいけないと思いました。そこで、妻といっしょにほら穴を上って、岸辺に向かいました。湖に木が浮かんでいたので、ふたりはそれに飛び乗りました。木は、ふたりを乗せてむこう岸まで運んでくれました。

ふたりは、たっふり歩いて、やっと見覚えのある所までやって来ました。男は、ふと思いました。

「どうしてまっさきにまじない師の所に行かなくてはならないんだろう。まっすぐ家に帰ったつてかまうもんか」

ふたりが村のすぐそばまで来たとき、妻がいました。

「あなたの顔、とってもよこれているわ。村に入る前に顔を洗ったら」

男は、ためらいもせずに、すぐに顔を洗いました。それで、まじない師が書いてくれた最後の文字も消えてしまいました。

男はふり向いて、

「さあ、行こうか」といおうとしました。ところが、妻のすがたはもうそこにはありませんでした。

「そうか、先に帰ったんだな」と、男は考えました。

男は、村に入って行きました。そこは、まるで見たこともない村でした。何もかもが、すっかり変わっていました。

男が住んでいた家のあとにも、新しい家が建っていました。そこに、若者と娘が住んでいましたが、それが自分の子どもたちだとは、男はまったく気がつきませんでした。子どもたちも、髪もひげも真っ白のその年寄りが、父親だとはまったく分かりませんでした。

男は妻を探しましたが見つかりませんでした。そこで、いとこを探しました。村の人は、「その男なら、何年も前にとくに死んだよ」といいました。

男は、夢中になって妻を探しまわり、妻のすがたを最後に見た森にも行ってみましたが、見つけることはできませんでした。

ある日、男は不意にいなくなりました。死者の国へもどったのだという人もいましたが、どうなのか、よく分かりません。

男の子どもたちは、一度、あのまじない師に出会ったことがありました。まじない師は、

「おまえたちの父親は、二度ともどつて来ることはあるまい」といいました。

子どもたちはおとなになって、やがて、それぞれ結婚しました。そして、自分の子どもたちにこの話を語って聞かせました。

これ以上は、わたしも何も知りません。

村上郁再話

資料『世界の民話 31 カリブ海』瀬戸武彦・伊藤富雄・持尾伸二訳／ぎょうせい